

「若者」とは何か？

その意識と行動様式の変容

* マンガにみるコード¹の変化と「若者」

戦前から 1950 年代：世代を超越した共通コードの存在と「秩序への信頼」

「『秩序侵犯』²にはじまり、主人公の少年が『強く正しく明るく』という<理想>に則して活躍することによって『秩序回復』がなされて終わる。」

「戦前から終戦直後までの少年・少女小説は、『<理想>の実現を媒介とする<秩序回復>』の物語という同一の構造を持っていた。」

「彼らが体現していた<理想>は、少年少女たちに固有のものというよりも、まさに大人たちを含めた、全社会的な<理想>だったのだ。

「読み手の少年から見て、<少年>は、大人とは違った少年としての少年では決してなく、<理想>とされる社会それ自体を体現していた。」

1960 年代から 1972 年：<秩序>への疑念・「サブカルチャー」としての若者文化の出現
時代状況：安保闘争・学生運動・平和運動（原水爆禁止・ベトナム戦争他）など、社会運動の激化。反体制的な動きの活性化。

「一般に、60 年頃の大衆文化には、『歴史の時間』の中で相対化される『社会』と、その『相対的な社会』によって翻弄される『小さな個人』という観念とを、同時に導入するという展開がみられた。」³

「『個人』を疎外する『社会』への否定的意識が前面に押し出されていた背景には、都市と農村の格差や、都市における階層格差を、はっきり目に見える形で意識せざるを得なかった当時の社会状況がある。」

「[若者/大人]という共通コードに基づくコミュニケーションが一般化した。」

疎外するもの = 「社会」 = 大人 疎外されるもの = 「個人」 = 若者
疎外されるものとして共同性が成立。

1973 年から 1977 年：反体制から現状肯定へ

時代背景：連合赤軍事件と「革命」幻想の終焉。個人主義・ミーイズムの蔓延。

「60 年代の『小さな個人』という意識が痛切な<疎外>感や<解放>への希求に彩られたものだったのに対して、とりわけ 73 年以降のそれが基本的に現状肯定的な色合いに変わった。」

「共有された<理想>を持ち出すのは困難になり、代わりに『夢の実現』

¹ コード (code) とは、法典・規約・慣例・おきて・暗号などの意味がある。ここでは、表面的には現れていない、隠れた意味内容くらいに考えておきたい。なお、ここでの議論は主に宮台真司に依拠している。

² 例としては、両親の謀殺、気違い科学者による発明の悪用、火星人や海底人の来襲、怪盗による殺人や盗難など。

³ 「他方で<秩序回復>の物語は、...ウルトラマンの怪獣退治に見られるように文字通りの『超人』によって担われるようになり、60 年代半ばには、『幼児向けの娯楽ツール』へと完全に特化した。」

や『成長』へと<課題達成>が『個人化』される。」

「もはや、自分<たち>を最終的に<解放>してくれるような輝かしい<外部>はない。たとえ戦争が始まろうと世界が廃墟になろうと、衣食住や個人的なトラウマや些細な対人関係のトラブルといった『日常性』はいつまでも続く。」

「<イエ>や<体制>といった外的な拘束への対抗に支えられた『<若者>としての<我々>』という『世代への帰属意識』も伝承されにくくなり、代わって『唯一性としての<私>』『私だけがわかる<私>』が問題化しはじめる。」

1980年代以降のマンガには、の時期を経て成立した個人主義に支えられた、『閉じた日常性の意識』⁴が通底している。

日常性意識の強まりにともなう「関係の偶発性 (= 不透明性)」意識の上昇
; 予定調和・ステレオタイプの消滅。ex. 愛・性・結婚の分化
不透明な日常・自明な存在の消滅・過剰に複雑な関係性

日常性の「過剰」に対する2つの無害化の方向性

)「無害な共同性」⁵

; “記号”化された(カッコいいソレっばい)シチュエーションや言葉への『短絡化』
モデル自体を短絡させ、現実を「耐えうるもの」として強引に読み替える⁶

; 「外部無関連化=内部同一化」・「それってある!」的な共同性。

「差異化ツールであったはずの“記号”性が、内部同一化の確認のためのツールとして読みかえられる」

)「無害な異世界性」⁷

; 「現実から完全に隔離された『異世界』に関係性を囲い込んで偶発性を遮断してしまう」

現実的なコミュニケーションを遮断した、『空想』『想像』世界への『逃避』

『カタストロフ後の共同性』などを『アイドル消費的に』楽しむ

“関係の積み重ね”に基づく友情から、“偶然の同居人”の「希薄な共同性」へ

世代間だけでなく世代内においても共通コードが失われる

社会の『島宇宙化』

⁴ これは、全共闘世代が、学生運動等を通じて表向き社会に対する働きかけを行っていったのと対照的に、身近な生活世界のみに関心を示す意識といってよい。

⁵ 具体的な例としては『東京ラブストーリー』や『不ぞろいのりんごたち』、『金曜日の妻たちへ』などが想定される。

⁶ ある意味では、現実のドロドロとした部分を、自分たちの「都合のいい」ように読み替えることによって無害化を試みているということも可能であろう。

⁷ 例としては、『宇宙戦艦ヤマト』、『うる星やつら』、『風の谷のナウシカ』などが挙げられている。いわゆるオタク族といわれる人々がこれに当てはまる。コミュニケーションに対する不安などが、オタク族を非現実空間へ『逃避』させる要因となっており、オタク族の多くは深い人付き合いを避ける傾向があることは事実である。それゆえ、「一般の」人々からは変人扱いされ、宮崎進の事件以来、オタク的な人々は時として「危険なもの」として扱われてきたが、「一般的に」考えられているようなイメージとは違い、多くのオタク族は空想世界と現実世界を明確に分離しており、現実世界における「息苦しさ」を空想世界によって癒しているに過ぎないといえる。

* 「新人類」世代⁸における島宇宙化の実態

宮台による新人類世代の分類

ミーハー普通人

メディア性が高く、高度な対人能力を持ち、異性志向が強い。付和雷同型でトレンドになびく。新人類の中核に相当すると考えられる。

先端的高感度人間

可処分所得が高く金持ち。高校デビューで遊びなれている。決まった少人数グループで行動し、付和雷同しない。トレンド発信源で、新人類の先端に相当すると考えられる。

バンカラ風さわやか人間

勝ちたがりで、強い上昇志向があるが、メディア性は低く、人情に篤い。有名大学体育会系に多い坊ちゃんタイプ。

アンバランスなスペシャリスト (=いわゆる「オタク」の人々)

「かれらの特徴は『なんらかの極端なマニア』ということである。音楽、アニメ、写真、コンピュータ、マンガ etc.その方面では高感度人間なのだが、その狭い分野に集中するあまりに他の分野にはきわめて鈍感になってしまう。対人能力は低い。

ネクラ的ラガード⁹

対人能力が低く、得意分野が皆無で、内にこもってまったく目立たない。いわば翼をもがれた「アンバランスなスペシャリスト」に相当する。

宮台による新人類世代の人格システム類型¹⁰

ミーハー自信家 (上記の の一部が相当)

高度な情報処理能力を用いて、着たい水準を自由自在に調整する、柔軟いシステム。

頭のいいニヒリスト (上記の の一部が相当)

期待水準を万事低めに設定することで、期待はずれから自らを免疫化するシステム。

バンカラ風さわやか人間 (上記の が相当)

期待水準を万事高めに設定し、期待はずれに際しては規範的に対処する (期待した自分ではなく、失望させた相手が悪いとみなすことで、期待水準を変えない) システム。

ネクラ的ラガード (上記の が相当)

期待はずれが生じうる領域 (とりわけ他人の批判的視線を浴びやすい対人関係の領域) から退却する非活動的なシステム。

友人ヨリカカリ人間 (上記の の一部が相当)

近隣の活動的で目立つシステム (したがってミーハー自信家) に追従する模倣的なシステム (見かけ上は模倣の相手と見分けがつきにくい)。

* 島宇宙化の行き着く先 文化志向から関係嗜好へ

かつての若者文化の特徴：対抗性と下位性

⁸ 宮台たちの定義では、新人類世代とは 1956 年から 1963 年生まれの人々としている。宮台たちは、1985 年に、リクルート社の保有する学生名簿から無作為に 1500 人を抽出し、因子分析とクラスター分析を用いて上記の類型を析出している。

⁹ ラガードとは、マーケティング用語で、もともとは「遅れてきた者」を意味する英語。

¹⁰ この類型の析出は、前記の調査とは別途に、1986 年に首都圏の大学生 3000 人を無作為抽出して行ったものである。

既存の文化に対する反発（対抗性）と、既存の文化との差異化（下位性）

革命幻想の終焉にともなって対抗性が失われるとともに、若者文化さえも、後続の世代にとっては「既存の文化」とみなされる。

新人類文化が社会全体に蔓延していく一方で、他者の視線を気にしながら記号的差異化を脅迫的に繰り返すことに疲れ、ある種の脱力感を持って身近な関係性へと閉じこもる、新たなタイプの若者たちが登場するようになる。

下位性の喪失

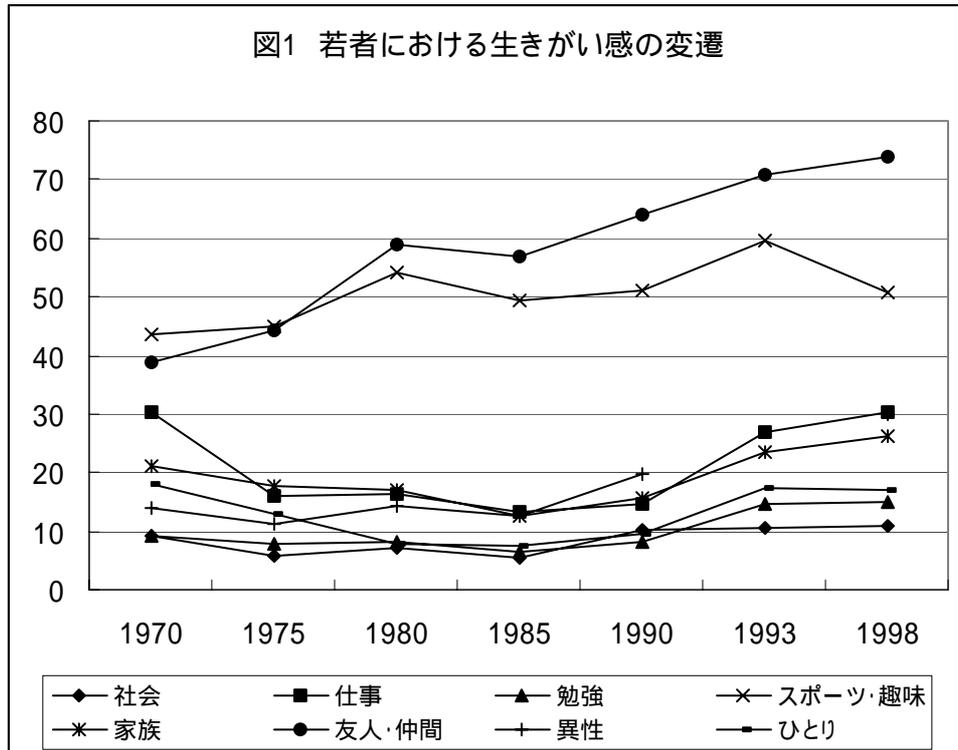
新人類世代では、若者文化としての共通コードが失われるが、その反面、「こぞって記号的差異化競争に参加することで代代的なつながりを保っていた。」

「これに対して、団塊ジュニア世代が主役となる 1990 年代の若者たちの世界においては、彼らと大人たちとを区別する手立てはもはやなく、また 80 年代のように、多様な象徴的領域のうちの 1 つ（あるいはそのうちのいくつか）に執着することで、アイデンティティの根源を確かめるといような姿も見られない。」

「共通の文化を前提とすることができない以上、自己防御のために深いコミュニケーションの回避がなされる。」

「しかしながら注意すべきは、実はここにおいてコミュニケーションそれ自体が忌避されているわけでは決してないという点だ。現代の若者たちが社会関係全般から撤退しているとするのは、単なる偏見に過ぎない。むしろ彼らは、かつての若者たちと同じか、あるいはそれ以上に、他者との関係性を大事にしている。」

共通の文化的基盤を持たない現代の若者の人間関係は、きわめて身近な範囲にそのひろがり限定されてしまう傾向にある。



現代日本の若者たちは、親密さや安心感を希求する一方で、関係性にとまなう心理的負担を忌避する傾向が強いため、なかなか他者のプライバシー（生き方に直接触れる部分）に介入したがない。」

浅薄な親密性・個人の領域の重視